

## 吉野ヶ里遺跡は、

### こじつして残った

九人の男たちの「あの日」のドラマ

元西日本新聞記者

吉 儀 利 彦

佐賀県徐福会の会長から手紙が届いた。小城羊羹の老舗・村岡屋の社長村岡央麻さんである。「徐福シンポジウムを開催するのに合わせて論文集を作りたいから一筆書いて欲しい」という。

論文なんて、研究活動もしていないし、まして学者でもないのだから断りしようとしたら、「いや、何でもよい。あなたがいた西日本新聞と徐福シンポジウムとのかかわりなど何かあるでしょう」と、たたみかけて来るではないか。

徐福についての熱心さ、たぎるような情熱については、他を寄せつけない村岡さんである。気がついたら、「はあ…」と首を縦に振った結果、タイトルに上げた逸話を紹介することにする。

この話を耳にしたのは、西日本新聞佐賀総局勤務だった一九九三年（平成五年）秋ごろだったろうか。気のおけない仲間たちと一杯やっていた時だったと思う。

仲間と言うのは、当時、西日本新聞とSTSサガテレビなどが作った東アジア文化交流史研究会（会長・山川寛元佐賀大学学長）に關係したメンバーだった。研究会が五年間にわたって情報発信し続けて来た徐福に始まる古代史シンポジウムのことが、ひとしきり話題になった時だった。

「吉野ヶ里遺跡が残ったのは、「あの日」があったから。そして西日本新聞の坂井さんの一言からだったですよ」と、誰かが言ったのがその発端だった。



この話は、当時の西日本新聞の「日曜コラム」に紹介はしたのだが、かねてから何時か、もう少し詳しくきちつとした形で活字に残しておきたいと思っただけに、実は今回、こうした機会を得たことに感謝している。そして話に登場する人の中にはその後、彼岸に渡った方もおられる。鎮魂の思いも込めながら、当時の取材メモから「あの日」のことを再現して行くことから始めたいと思う。

(文中敬称略・肩書きは当時)

### 残っていたビデオテープ

「あの日」とは、一九八九年(平成元年)二月十一日のことである。すでに日は西に大きく傾く冬の夕暮れに近い時間であった。

佐賀県・吉野ヶ里遺跡には、大陸からの季節風が脊振山を越えて、びゅうびゅうと吹いていたという。そんな「脊振降ろし」にジャンパーやコートの際を立てる九人の男たちがいた。

元京都大学教授の樋口隆康、元東京大学・京都大学教授の福永光司、天理大学文学部教授の金関恕、佐賀県教育委員会文化課係長の森醇一郎、同文化課調査員の七田忠昭、サガテレビ専務取締役の内藤大典、同常務取締役報道局長の久富正美、同ディレクターの横尾正之、そして西日本新聞論説委員の坂井孝之の九人である。(うち福永、内藤、坂井は、いまは故人となっている)

その時のことを久富は、こう述懐する。

「あの日は、やたら風の強い日でしたね。寒かったですよ。あれは、徐福をテーマにした第一回古代史シンポジウムを前にした時でした。先生方に中国、韓国などでの学術調査をしていた後、徐福が上陸をしたと伝えられる佐賀平野も見てもらおうと、樋口、福永、金関の三先生方に来て頂いた。視察を終え、サガテレビで一服していたのだが、時間があつたので、森さんに相談したら、『いま掘っている吉野ヶ里を見てもらったら』と言うので、森さん、七田さんの案内で、出かけたんですよ」

また、吉野ヶ里フィーバーになる前のことで、吉野ヶ里丘陵地一帯七十六・六ヶヶは、県の手で工業団地になることに決まっていた。団地造成を前にした県教委による発掘調査が一九八六年度から三カ

年度計画で行われていたのだった。

調査の中で、弥生時代の環濠集落をはじめ、約二千基に及ぶカメ棺墓、巴型銅器の鋳型なども見つかり、当時の西日本新聞には、「弥生最大級の環濠集落」などといった見出しのスクープ記事が載っている。

しかし、すでに一九八九年一月二十五日に工業団地造成のための起工式も終わり、三月にはブルドーザーが入るばかりになっていた。

「あの日」は、まさにその矢先であった。

当時、東アジア文化交流史研究会の事務局

長でもあり、徐福伝説に魅せられ、徐福シンポジウムの推進役だった内藤は、「あの日、現場についていたら先生方皆が一樣に興奮していましたね。その時の様子はビデオに収めてありますよ」と、生前教えてくれた。

サガテレビにそのテープはあった。久富の案内で見せてもらった。そこには、人気のない遺跡を見て回る九人の男たちの姿があり、先生方のコメントも記録されてあった。

「迫力を感じます。出土品や住居跡、倉庫跡、カメ棺など種類が豊富です」(樋口)

「大規模な弥生環濠集落に興味をそそられますね」(福永)

「長さ一<sup>キ</sup>の深くて立派な溝があり、オリエント小規模古代都市国家に匹敵するものですよ」(金関)

### 坂井氏の一言がきっかけで…

テープを再生しながら、記憶がさらに甦ったのだろうか。久富は「そうそう。福永先生は、小高い所を指差し、『あれはポイントだぞ』と、後日、吉野ヶ里遺跡の価値をさらに高めることになる有柄式銅剣や管玉などが出土した墳丘墓の発見を予言するかのよう盛んにおっしゃっていました」と、語気を強めた。

金関先生は、環濠のスケールをしきりと気にされていましたという。「先生は、唐古・鍵遺跡が一番なのだが、どうなのだろうか。



調べないと分からないが、一級品には違いない、と言われた。先生方は異口同音に『このままじゃもったいない』『壊されるのは惜しい』『残さんといかなあ』などと盛んにおっしゃっていましたねえ。後日、七田さんから聞いた話では、あの夜、金関先生から七田さんに電話があり、環濠や城柵、物見櫓、出土品など、いろいろ質問されたそうです。確かめておられたのですねえ」。

森も「あの日」のことは、よく覚えていた。

「私は、『あの日』のことがなかったら、吉野ヶ里は残らなかったと思っと思っています」と言つと、森は一気に語りだした。

「とにかく既に起工式も済み、着工するばかりでしたから、正直、誰もあきらめていましたよ。あの樋口先生が『残念だが、もう遅いねえ』とポツリと漏らした時でした。坂井さんが意を決したように先生方に訴え始めたのは……」

先生、これは西日本新聞の限界です。ぜひ全国紙に書いてもらつよう話をして下さい、と坂井さんは切り出したんですよ。

森は、そんな風に言葉を継ぐと、「私は、この坂井さんの一言がきっかけだったと思いますね。金関先生が『これは本当に大事なものです。樋口先生、残すべきです。私が大阪で動きますから、樋口先生は東京で動いて下さいよ』とおっしゃったのです」と加えた。

その坂井は生前、「いやあ、本当はじくじたる思いがあるんですよ」と言つと、「あの日」のことを思い出してくれた。

「だって競争している他社の新聞に書いてくれるよう頼んだのですから。あとで同人たちにも怒られましたよ」

「しかし、あの時は正直、先生方が異様に興奮して語り、何とか吉野ヶ里を残したいという思いが先に立っていました。先生方からは『環濠集落の規模はメソポタミアの古代都市に匹敵する』『これは保存しなきゃいけない。新聞は何をしているのかね』とも言われまして……。気がついた時は、私は『これまで西日本新聞は三回大きく報じたが、他紙は報道しない。全国紙の考古学専門の記者に取材するよう勧めて下さい』と訴えていたのです。これは、国の宝です。子孫のために残さなくては、という気持ちでしたね」

このことについて、坂井は、句誌「冬野」（徐福特集号）に寄稿した「徐福と吉野ヶ里遺跡のこと」と題する小文の中でも触れている。

坂井の「あの日」の訴えについて、当時、内藤は「後で樋口先生

から伺ったのですが、樋口先生は全国紙に書かせることを金関先生に任せましたよね。坂井さんの話を受け、あれからすぐ金関先生が奈良国立文化財研究所部長の佐原眞先生に伝えたそうです。「森も「事の重大さを知った佐原先生が朝日新聞の記者に話をし、それが一面トップを飾ることになったわけです」と明かした。

### 邪馬台国時代のクニだった！

当の佐原も金関からの電話を認め、月刊「ASAHI 創刊号」（朝日新聞社刊）の中で、こう語っている。

《（吉野ヶ里遺跡のかかわりについて）金関恕さんからの電話でした。いつもは穏やかな口調の彼が、すごく興奮してかけてきました。「すごいですよ、濠が外にまるく張り出していて、その内側に望楼の跡がある」って。二月十二日夜、十一時を回っていました。（中略）だれかに伝えたいという衝動が抑えられない。年に何回もないですね、ああいう感動は。（中略）二月二十二日に現場に立ったときは、燃えるような思いでした。》

「現場に立った」のが、実は朝日新聞の記者と一緒にだったと言われている。そしてその翌日、一九八九年二月二十三日付朝日新聞は、一面トップに吉野ヶ里遺跡のことを大きく報じたのである。

《邪馬台国時代の「クニ」 「倭人伝」の記述と対応》

この見出しの記事には、まさに中国の史書「魏志倭人伝」にある楼観、城柵を持つクニをほうふつとさせるような学者の見方が、そこにはあった。その間のいきさつを一九九一年（平成三年）六月、吉野ヶ里遺跡の近くの三田川町公民館で朝日新聞東京本社編集委員の藪下彰治朗が講演の中でふれたという。

月刊「新郷土」平成三年十月号がその内容を掲載している。さわりの部分



だけをごく簡単に要約すると、次のようなものだ。

「一九八九年二月十九日、佐原先生が東京本社に挨拶に見え、「明日、佐賀に行く」という。「何をしに行くのか」と問うと、「佐賀の研究者からちよつと見てもらいたい遺跡がある」という。忙しい先生が行くというのは、よくよくのことと思つた。しかし、（新聞社の情報網でも）分ならず、文化庁でも分らなかつたが、そこで手に入れた「佐賀の自然と文化をまもる会」の陳情書を読んで、吉野ヶ里は「魏志倭人伝」に書いてあるのと一致していることを知り、取材チームを作つた。佐原先生も二月二十二日の現地視察後ならレクチャーできるということを確認した。当日は他のマスコミもいて、そこでレクチャーがあつたので、勿論、他社の皆さんもいた。」

事実、佐原が吉野ヶ里に来ていたというニュースは、地元のマスコミ各社にも入り、記者たちが現場に行った。

当時、サガテレビの取材記者として駆けつけた北村和秀（現在、エスプロダクション代表取締役社長）は「キー局のフジテレビからは、『朝日、NHKに抜かれていないではないか』とひどく怒られましたので、忘れませんよ」と、当時のことを語つた。

「佐原先生が来るというのは県教委からの情報で、各社知りました。現地で先生を囲んで記者たちが質問したのに対し、『物見櫓、城柵、環濠があり、弥生時代は戦国時代の様相を呈していたことを物語る貴重な遺跡だ』と語られたので、各社その通りの報道したのですが、翌日、朝日新聞とNHKの『邪馬台国時代のクニ発掘』という報道にはびつくりしました」

「佐原発言のビデオテープを何度聞いてもその下りはありませんでしたからねえ。後日、聞いた話では、共同会見の後、朝日新聞とNHKには『魏志倭人伝にある邪馬台国時代のクニをほうふつとさせる』と語つたのだそうです」

「我々の誰かが邪馬台国との絡みの質問でもしていれば、違つていたのでしょうか……。勉強不足だったし、頭もめぐらなかつたですなあ」と笑つた。

佐原が最初、朝日新聞を訪ねて、どのようなやりとりがあつたのか、そんな詮議はどうでもいい。とにもかくにも坂井が意図した全国紙の大々的な報道は、こうして実現したのだった。吉野ヶ里に冬の北風が吹きすさぶ「あの日」から十二日目のことである。

佐原の説く吉野ケ里遺跡の意味づけは、文字通り邪馬台国論争に一石を投じる、極めてインパクトの強いもので、他のマスコミも続いて大きく報道していくことになる。

### 残せコールの大合唱

こうして、この「朝日報道」をきっかけにしたマスコミ報道により、吉野ケ里遺跡に対して、全国の考古学者をはじめ、多くの人たちの目が向けられ、遺跡は一躍有名になり万民の知るところとなった。それは、あつという間に連日あふれんばかりの見学者が押しかける吉野ケ里ファイバーを呼び起こした。

大ファイバーは、「残せコール」の国民的大合唱へ。そして世論のおおきなうねりは、佐賀県の方角転換を促し、県はついに起工式も終わり、着工寸前であった工業団地を反故にしての遺跡保存という断を下したのである。

文化庁の反応、対応も極めてスムーズであった。恐らく樋口が事前に遺跡の意義、保存の重要性を伝えていたからに違いない。三月五日には文化庁と佐賀県とが保存に同意する速さであった。

吉野ケ里遺跡は、国の特別史跡の指定となり、一九九二年（平成四年）十月に国営吉野ケ里歴史公園として整備されることが閣議決定。二〇〇一年（平成十三年）四月に開園した。公園の広さは国営・県立合わせて六十九ヘクタールである。

こうして現在、「弥生人の声が聞こえる」をテーマ国営公園として保存整備が進み、一九九六年（平成八年）の「世界炎の博覧会」では、サブ会場として様々なイベントが行われ、今日、九州は勿論、全国的にも名の知られるようになった春のウォーキング大会「吉野ケ里菜の花マーチ」など、数多くのイベントが行われるようになった。二〇一八年度には博物館が誕生する予定でもある。

そしてここ歴史公園を訪れる人は、



毎年五十万人前後を数え、この六月には開園以来の入園者数が四百万人を超えた。日本人はどこから来たのか。弥生時代の暮らしはどうだったのか。はるか古代の日本に人々は思いを馳せ、ロマンを膨らませる。

その後、亡くなってしまった坂井をはじめ、福永、内藤、佐原：ら関係者は「いやあ、お互い皆頑張ったなあ。吉野ヶ里が残って本当に良かった」と満面の笑みを浮かべながら、語り合っているのではあるまいか。

最後に生前の坂井の言葉を紹介して結びとしよう。

「考えてみたら、もしも私たちが徐福シンポジウムをしなかったら、またその事前の学術調査に先生たちを呼ばなかったら、いや、『あの日』、吉野ヶ里まで足を伸ばさなかったら、遺跡は破壊され工業団地となっていたでしょう。そういう意味で、徐福の霊が乗り移ったかのように、『徐福、徐福』と言って回り、『内藤徐福』の二ツクネームで呼ばれる内藤さんの功績は大きい。内藤さんの熱心さに負けて、先生方はまるで徐福に誘われたように吉野ヶ里遺跡にやって来たのだから……」。

歴史にはドラマがある。劇的な展開で残ることになった吉野ヶ里遺跡。まさに「あの日」の一日こそはドラマそのものと言えまいか。まるで保存があらかじめ運命づけられていたかのように、「あの日」の九人が、それぞれの役を担って演じてくれたように思えるからである。

ひよつとしたら、それはおよそ二千年前に海を越え、中国からやって来たと伝えられる徐福が、そのシナリオを密かに書いてくれたのかも知れない。

【付記】吉野ヶ里遺跡を貴重な遺跡だとして残すことに、様々な人たちが関り、行動をした。それは「子孫への贈り物。国の宝、日本人の宝だ」という一点への熱い思いが、重なり合い組み合わせたものだった。

例えば、遺跡を世に出したと言っているいい地元高校教諭だった故七田忠志さんをはじめ、その志を継いだ故牛島国枝さん、吉野ヶ里遺跡全面保存会長だった故石田一二さん、元保健所長の太田記代子さ

んら数え切れない人たちがいた。また、署名活動をはじめ、保存運動に奔走した多くの無名の活動家たちもいて、吉野ヶ里が残ったことは言うまでもない。その一つが「あの日」のドラマである。敢えてそのことを記し、保存に関係した多くの方々に敬意を表しながら筆を置きたいと思う。

(了)

